

松くい虫防除事業について

松くい虫とは

松くい虫の正体は、マツノザイセンチュウという線虫です。アカマツの中でこの線虫が繁殖すると、1～2週間でマツヤニが出なくなり、針葉がしおれ、わずか1ヶ月たらずで真っ赤になり枯れてしまいます。春先に針葉が青々としていたアカマツが夏ごろ真っ赤に枯れてしまうのもこのためです。このマツノザイセンチュウはマツノマダラカミキリというかみきり虫を媒介にほかのアカマツへ運ばれていきます。松くい虫防除事業では、マツノザイセンチュウの運び屋であるマツノマダラカミキリとその幼虫を薬剤で駆除することにより、松くい虫の被害拡大を抑制することを目的に実施されます。



マツノマダラカミキリ(運び屋)



マツノザイセンチュウ(病原虫)

くん蒸処理とは

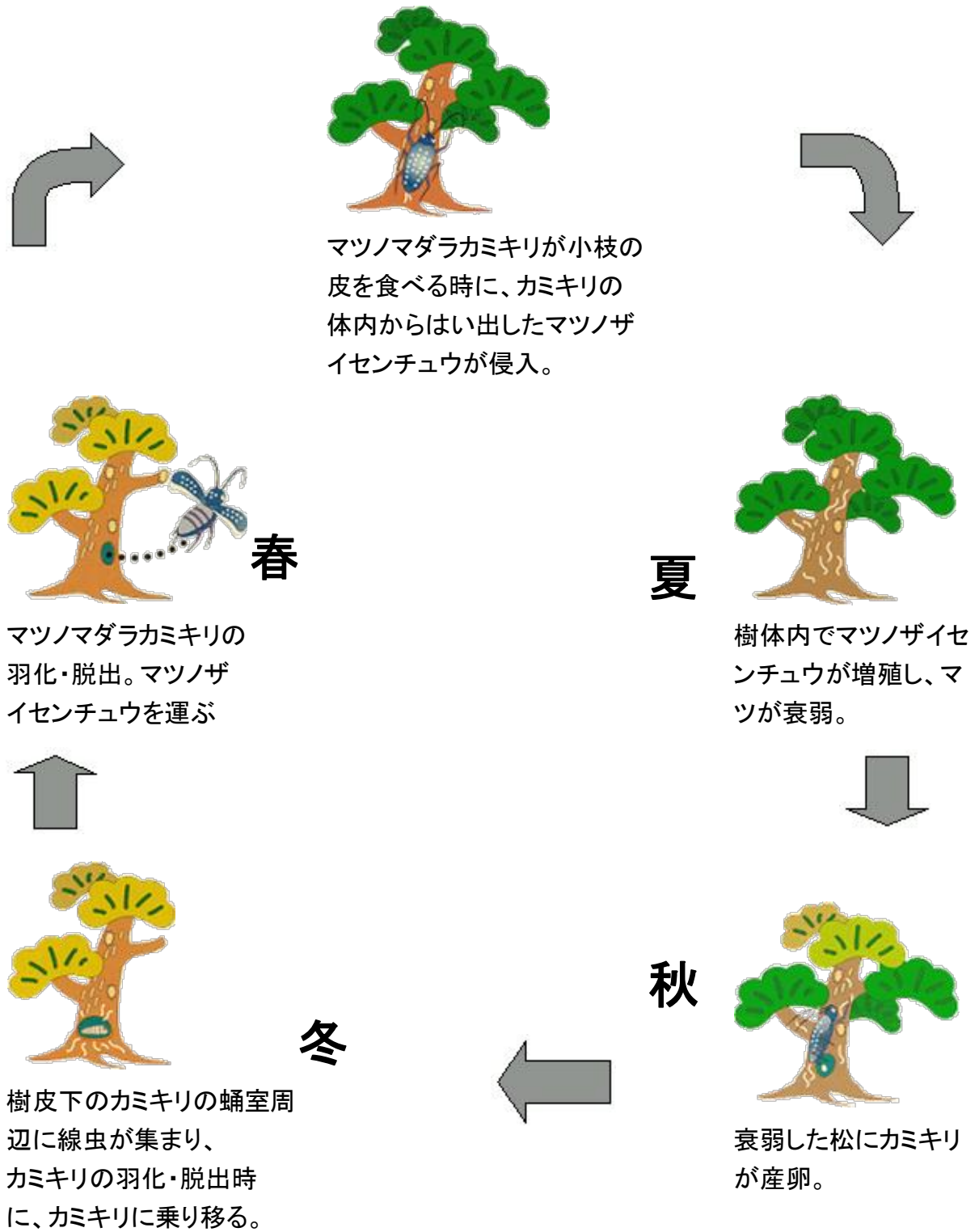
被害木を伐倒、玉切り(切断)します。枝を下にして、その上に丸太をはい積みします。積んだ丸太をビニールシートで密閉し、その中に薬剤を散布します。マツノマダラカミキリの殺虫効果は高く、一般によく使われる方法です。



駆除の時期（春駆除と秋駆除）

松くい虫の防除事業は一般的に春と秋に実施されます。春駆除はアカマツの樹皮下で越冬し成虫になったカミキリムシを、秋駆除は樹皮下に生息するカミキリムシの幼虫を駆除する目的で行われます。夏期はカミキリムシが飛び回り、高い効果を期待できないことから駆除を行いません。

松くい虫被害発生メカニズム



カシノナガキクイムシ防除事業について



(写真) 新潟県での被害状況

カシノナガキクイムシとは

カシノナガキクイムシとは体長３ミリ程度の小さな昆虫で、この虫が樹木に穴をあけ幹内に侵入すると、虫に寄生しているナラ菌とよばれる糸状菌が幹内で急激に増殖し、樹木の通水器官を破壊してしまうため、樹木が急速に枯れてしまうと考えられています。

被害の発生はナラやクリなどの雑木に集中しており、町内でもミズナラが被害木の９５％以上を占めています。この虫が侵入した樹木の根元には粉末状の木くずが大量に堆積するのが特徴です。(写真参照)

以前は松くい虫同様、冬の寒さが厳しい地域や標高の高い地域には発生しないと考えられていましたが、日本海側、特に北陸地方で深刻な被害が出ていることから気候や標高に関係なく発生することが確認されました。

カシノナガキクイムシ防除事業では、ナラ菌の運び屋であるカシノナガキクイムシを薬剤で駆除することにより、被害拡大を抑制することを目的に実施されます。



カシノナガキクイムシ（運び屋）



被害木の根元

くん蒸処理とは

被害木を伐倒、玉切り（切断）します。枝を下にして、その上に丸太をはい積みします。

積んだ丸太をビニールシートで密閉し、虫の飛散を防ぎ、伐倒した伐根に薬剤を注入します。

